



歓迎の挨拶をする和田豊司東海支部長

平成18年度年次晩餐会 初めての地方開催 元気いっぱいなのナゴヤで開く

■全国から435人が参加

平成18年度の年次晩餐会が12月2日、東海支部の主管で名古屋市の「ウエスティン ナゴヤ キャッスル」で開かれた。日本山岳会の年次晩餐会が東京以外で開催されたのはこれが初めて。435人の会員が参加した。いま東海が元気だという。日本経済をリードし、日本山岳会のなかでは東海支部が元気なのである。

■アルペンホルンに誘われて

アルペンホルンの演奏に誘われ

て会場に入った。例によってテールブルがずらりと並び、それぞれに山名が付けられているが、錫杖ヶ岳、宇連山、古町高山、白猪山……といったと違う。東海の山々である。開催地を意識せざるを得ない。アルペンホルンは長野・大桑村のひとつたちの演奏。

昨年亡くなられた会員に対する黙祷で晩餐会は始まった。村山雅美、今井喜美子、大井正一の各名誉会員ら62人が亡くなられた。改めてご冥福をお祈りしたい。

黙祷を終えると、オーケストラが入場してきた。会場いっぱい元気な音楽が鳴り響いた。東海学園交響楽団だそう。中学・高校生で構成され、総勢50人。曲は雪山賛歌、そしてブラームス。

■会長あいさつ

支部の活性化を図る

冒頭、平山善吉会長は、あらまし次のように挨拶した。

一、今年は東京を離れて名古屋で開くこととした。いつもとは違ったメンバーの参加を得ることと支部の活性化を図る狙いだ。今日まで準備してきた東海支部に厚く礼を言いたい。

一、一昨年は日本山岳会創立100周年を迎え、みなさんのご支援、ご協力をいただいた。記念事業はおおた終了したが、06年に入って英文ジャーナルの刊行、学生部による海外遠征などが続いている。11月には中央分水嶺踏査の残った2区間を踏査し、北海道・宗谷岬から九州・佐多岬まで約5500kmを線で結ぶことができた。『百年史』の刊行も07年には印刷に出せ



2007年(平成19年)
1月号(No. 740)

社団法人 日本山岳会
The Japanese Alpine Club

定価1部 150円

URL ● <http://www.jac.or.jp>

e-mail ● jac-room@jac.or.jp

目次

平成18年度年次晩餐会 初めての地方開催

元気いっぱいのナゴヤで開く… 1

秩父宮記念山岳賞を受賞して… 4

記念懇親山行… 5

猿投山/御在所山

2006年マナスルでの教訓… 6

東西南北… 7

バッジを巡る話

相模国府祭

支部だより… 8

宮崎/山形

パンフ・マウンテン・フェスティバル

2006年… 9

図書交換会出品目録および購入

申し込みのご案内… 10

活動報告… 12

学生部/自然保護委員会・山梨

支部後援/二火会

図書紹介… 14

図書受入報告… 15

会務報告… 16

ルーム日誌… 17

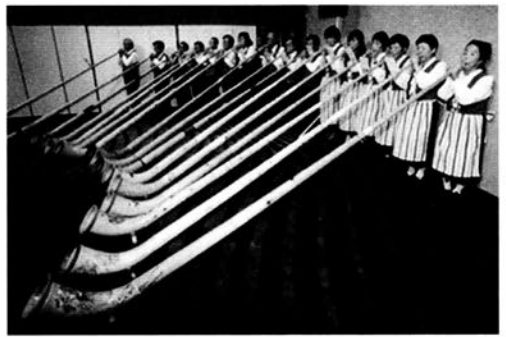
会員異動… 17

新入会員… 18

INFORMATION… 18

Climbing & Medicine 58… 19

▶ 日本山岳会事務局(含図書室)取扱時間
月・火・木 …… 10~20時
水・金 …… 13~20時
第2、第4土曜日 …… 閉室
第1、第3、第5土曜日 …… 10~18時



アルペンホルンに誘導されて入場(大桑アルプホルンクラブ)

る段階となった。

一、会の現状を報告したい。20歳代の会員は32人で0・5割。100歳を超える会員は3人で高齢化が進んでいる。会員の減少傾向が続いており、06年は1000人の減少となった。会員総数は5768人だ。会員の平均年齢は64歳となった。

一、次の100年に向かって日本山岳会がいかにあるべきかを検討してきた。できることから実行していくということ、役員定数を低減、執行機関と諮問機関を分離した。加えて定款の改正を行ない、11月に文部科学大臣の認可を得た。社団法人から公益社団法人

への移行を視野に入れ、準備・検討を進めている。

一、支部活動への支援・協力を行ないたい。支部長会議を支部持ち回りで開催。首都圏には、いくつかの支部が発足する見込みとなった。また委員会の後継者の育成と委員の公募を行なう。山岳保険の見直しなど会員に対するサービスの平等化を行なっていきたいと思っている。春から第三土曜日に開く土曜懇和会に役員が交代で出席し、幅広く意見交換する場をつくりたい。若い人たちの自発的な登山を支援、早い機会に偵察隊を派遣できるようにしたい。

■和田東海支部長あいさつ

4つの目標掲げて活動

東海支部を代表して和田豊司支部長が歓迎の挨拶をした。

「1961年に5人で発足した。以来、276人の会員をかかえるまでになった。ほかに支部友会員として261人いる。4つの目標を掲げて活動している。第1は、より高く困難を求めて登ること、第2は登山を広げること、第3は自然環境の保護、第4はボランティア活動だ。具体的には、ローツェ南壁への冬季初登攀、未組織登

山者に対する登山教室の開催、猿投の森づくりなど、これらの目標に沿って活動している」

続いて来賓を代表して加藤幹敏中日新聞編集局長が挨拶。

次に、新名誉会員が紹介された。新名誉会員は、松田雄一元副会長とハリッシュ・カパディア氏。松田会員はマナスル登山をはじめ日本山岳会の海外登山隊の派遣に対して積極的に貢献をされた。カパディア氏は長年にわたってヒマラヤンジャーナルの編集長として活躍、英国山岳会、アメリカ山岳会の名誉会員となっている。

松田新名誉会員は「名誉会員は日本山岳会が創立されたときから



オーケストラの生演奏(東海学園交響楽団)

存在し、ウェストンが第1号。私には125号となる。マナスル登頂以来50年を超えた。今後も会のために役立ちたい」と語った。

■永年会員の紹介

新永年会員が発表された。連続して50年会員だった会員である。入会は1956年度。この年の5月9日、日本山岳会がマナスルに初登頂した。新永年会員は34人。

新永年会員

熊谷松雄(4350)、中村一雄(4352)、北島正八(4354)、井口謙司(4357)、西牧康(4360)、寺田鬼久磨(4364)、西川益生(4365)、神原達(4366)、新井信太郎(4367)、熊谷とも子(4371)、橋本祥案(4375)、池田経昭(4376)、荒木昭(4382)、遠山博明(4395)、國分恒司郎(4408)、西沢健一(4427)、芳野起夫(4428)、落合是明(4430)、横山厚夫(4432)、近藤信行(4433)、平山善吉(4440)、竹島正義(4448)、鳥居鉄也(4449)、中島伊平(4460)、藤井信(4468)、相模八郎(4474)、山口節子(4475)、竹内満雄(4480)、塚本珪一(4



平山会長より永年会員章の授与

482）、樋口清明（4483）、三木亮（4486）、山口徳明（4488）、芳野菊子（4494）、今成幸夫（4495）

■秩父宮記念山岳賞

第8回秩父宮記念山岳賞は山本紀夫会員の「ア ند ス・ヒマラヤにおける高地民族の山岳人類学的研究」と決まった。表彰式が行なわれた。山本会員は「この賞は、元会長を歴任された今西錦司氏が一番貰いたくて、取れなかった賞ではないかと思う。文化勲章をも受章した人を差し置いて、後輩の私が頂いたことに大きな責任を感じている」と語った（4ページに報告）。

■中央分水嶺踏査に感謝状

中央分水嶺踏査事業の参加者は延べ1500人へのぼった。参加した人たちの労をねぎらい感謝状を贈ることとした。新妻徹・北海道支部長が参加者を代表して感謝状を受け取った。

塚本圭一 新永年会員の音頭で乾杯し、会食にはいった。塚本会員は「いま日本に必要なのは風土の再生だ。山を愛し自然のなかを歩いて得てきたものを子どもたちに伝えていこう」と語った。

■ローツェから現地中継

7時10分、会場が突然暗くなった。スクリーンに映像が映し出された。東海支部が派遣しているローツェからの現地中継。千田隊員からの報告だ。現地はまだ明るい。標高7100mでルート工作中だという。砂嵐が吹き荒れているらしく音声に雑音が混じる。和田支部長、平山会長が呼びかけた。会場に激励の拍手が巻き起こった。「ありがとう」という答えが返ってきた。現地に通じたようだ。3度目の挑戦だ。成功を祈りたい。会食をはさんで、各支部からの出席者、また新入会員の紹介があった。東海支部がもっとも多く113人。次いで岐阜35人、関西25



ローツェBCとの交信（現地中継は千田隊員）

人、京都20人と続く。最後に首都圏も紹介された。新入会員は121人、うち25人が参加した。

■遠征報告と記念講演

午後2時30分から学生部のヒマラヤ遠征報告などがあった。学生部は昨年9月、ネパール・マナスル山群の未踏峰パンバリ・ヒマール（6887m）に初登頂した。加藤好美隊長と中島隊員が報告。

続いて、第8回秩父宮記念山岳賞を受賞した山本紀夫会員による記念講演があった。山本会員はア ND スなどでのフィールドワークを紹介、ア ND スやヒマラヤなどの高地ではジャガイモを主食とする共通点のあること、これらの地

域にかつて高地文明が栄えていたことなどを紹介した。

■ナゴヤが東海支部が元氣

講演会の最後に東海支部の紹介があった。「いまナゴヤが、東海支部が元氣 その秘密を明かす」と題して、尾上昇会員が講師になつて講演を演じた。

鳴り物入りで登場した尾上講釈師は、ヒマラヤに憧れて支部を創設したこと、1966年のアコンカグアから始まってマカルー、K2などに登頂、いま冬季ローツェ南壁に挑戦していること、そして元氣の秘密は「ヒト、モノ、カネ」に恵まれていること、地の利のあることなどと解き明かしてくれた。グッズコーナーでの最大の出し物は金のピッケル。名古屋城の金のシャチホコにちなんで記念販売された。東海支部の梶田会員の製作によるもの。注目を集め、たちまち1本販売したという。

■猿投の森・御在所山で懇親山行

翌日の懇親山行は東海支部が活動が続いている猿投の森と鈴鹿・御在所山で行なわれた（5ページに報告）。

（文）高橋重之、写真）松波幹夫、奈良千佐子

秩父宮記念山岳賞を受賞して

山本紀夫

今回は名誉ある秩父宮記念山岳賞をいただくことができました、とても嬉しく、また光栄に思っております。審査にあたられました村木潤次郎委員長はじめ、審査委員の方々、さらにご推薦いただいた諸先輩に厚くお礼申し上げます。

今回、受賞の対象となりました

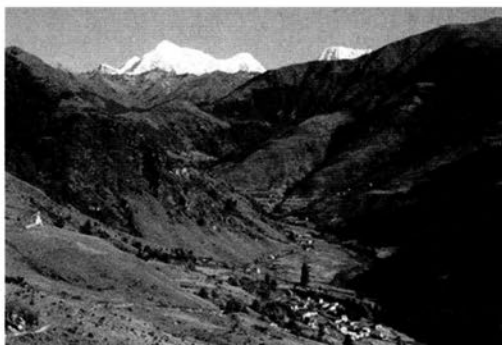
私の業績は「アンデス・ヒマラヤ高地民族の山岳人類学的研究」ですが、その発端になりました最初のアンデス調査は、もう40年近くも前の1968年のことです。当時、ネパール・ヒマラヤは登山を禁止しており、未踏峰の登山も目的とした学術調査を考えていた私は、ヒマラヤを諦めてアンデスに向かったのです。そして、これが後の私の人生を決定することになりました。私の関心が登山から次第にアンデス高地で暮らす人たちに移っていったからです。

ご存知のように、アンデス高地ではインカ帝国に代表される高度な文明が築かれ、現在も「インカ

の末裔」と呼ばれる先住民の人たちが暮らしています。ところが、彼らの多くが富士山の頂上よりも高い標高4000メートル前後の高地で暮らしており、そこは寒くて、また空気もうすい所です。そのため、それまで彼らの村に長期に定住して、調査をする民族学者はほとんどいませんでした。

そこで、私は「民族学者が誰も調査をしないのなら私がやろうか」と思うようになりました。その背景には、私が学術登山や初登頂主義、さらにパイオニアワークを標榜する京都大学学士山岳会に所属していたことが大きな影響を与えておりました。当時、すでにアンデスでもめばしい未踏峰はなくなっており、初登頂の目標は失われていましたが、山を舞台にした研究の上での初登頂なら狙えると考えたのです。

こうして、私はもともと植物学を専攻していたのですが、博士論文を提出したあと民族学に転向しました。そして、かつてインカ帝



アンデスとの比較調査を行なったネパール東部のソル地方。後方の雪山はスンブール峰(6957m)、手前にジュンベシの集落が見える。

国の中心地であったペルー・クスコ地方の村に住み込み、約2年間インディオと呼ばれる先住民の人たちと暮らしをともにして民族学の調査を行いました。また、アンデスの特徴を知るために、アンデスを北から南まで広く歩き回ることもしました。その結果、アンデス高地の特色とそこでの先住民の人たちの暮らしが理解できるようになりました。

ここで、さらなるパイオニアワークを目指すことにしました。それがアンデスとヒマラヤにおける高地住民の暮らしの比較調査です。それまで両地域で本格的なフィールドワークを行なった研究者がい

なかったからです。アンデスでは私一人での調査でしたが、ヒマラヤでは10人近い研究仲間の協力を得ての調査となりました。調査を行なったのは、ネパール東部に位置するヌンブール峰の山麓にあるジュンベシ村で、ここは登山のガイドやポーターとして有名なシェルパの村です。このときの調査成果は2000年に『ヒマラヤの環境誌―山岳地域の自然とシェルパの世界』(八坂書房)として刊行しましたので、ご覧いただいているかもしれません。

さて、最後に今後のことも少し述べておきます。私は今春に長年勤めていた国立民族学博物館を定年で辞めることになっておりますが、山岳地域を舞台にしたフィールドワークを辞めるつもりはありません。世界には、アンデスやヒマラヤ以外にも日本では考えられないほどの高地で多数の人々が暮らす地域があり、そこでも調査をしたいと願っているからです。受賞講演のときも述べましたように、私は生涯を通じて山岳地域でのフィールドワークを続けるつもりなのです。

記念懇親山行 猿投山コース

猿投山(629^{メートル})はその名の由来となる南麓の猿投神社が約1700年前の創建と歴史が古く、東西南北への尾根の張出しが発達して深山の趣きがあるなどから愛知県随一の名山とされる。山体母岩がすべて花崗岩であるため、泥濘がなく歩いていて気持ちが良い。早朝、名古屋のホテルを貸し切りバスで出発した一行45名は、東海支部要員6名の案内で3班に分かれ、猿投神社から歩き始めた。順調に進み、頂上(一等三角点)午前10時過ぎに到着。雲が多く、残念ながら御嶽山、白山、三ノ峰、荒島岳、能郷白山などの眺望は得られなかった。

頂上では、川合寿之、筆者(橋村一豊)、2人の森林インストラクターが待ち受けていて、ここで全体を2分し、川合と筆者による土壌、地史、植生、森づくりの現場などの解説を受けながら森林施業の中心地「内院」へ下った。

内院では、寺西申生司厨長髻配下12名の供応でシジミ汁の昼食が

出された。このシジミは木曾川の左岸の側で、職漁師が獲った純愛知県産のものというこだわりよう。味噌は岡崎の八丁味噌である。

そこには登山を省いて名古屋のホテルから森へ直行した宮下・田邊・平林・芳賀・賛田・吉村・高野さんら長老会員の方々が、焚火を囲んで登山隊の到着を待っておられた。そこから、もう一山越えて雲興寺まで歩き、待たせてあった貸し切りバスに乗ったのは、14時ごろであった。(橋村一豊)



猿投山コース、猿投の森での集合写真

御在所山コース

変化のある御在所山・中道コースを登りに、東海地区屈指の岩登りゲレンデである藤内壁が見えるコースを下りにとるルートを記念懇親山行として企画した。会員65名のほか、支援者17名の合計82名が参加した。

晩餐会の興奮と、宿泊に利用した朝明小屋でのさらなる懇親会の疲れによるリタイヤパーティも用意したが、予定通りほぼ全員が中道コースにチャレンジした。

当日は、紅葉も終わり頂上付近は雪という予報であったが、元気に登山口を7時15分に出発。中腹から上部は雲がかかり、雪や氷の不安もあった。主稜線上部には岩場、キレットもある。そのため、サポーター部隊の張ったフィックスロープを使い、安全を確保しながら登った。北斜面では1、2センチの積雪があり、緊張する場面もあった。

天気が良ければ、中道主稜線からは、はるか伊勢湾や知多半島も見渡せるのだが、残念ながら上部は雲の中。おかげで頂上付近では木々にびっしりと霧水がつき、

わずかな積雪と合わせ、冬の気分を味わうことができた。

下り始めると、除々に視界が開けてきて、やがて藤内壁が見えた。岩峰、岩壁が連なる藤内壁には登攀中のクライマーの姿もあり、楽しんでいただけたかと思う。

藤内小屋では、支部会員が前日から荷揚げして準備した、新米の手作りおにぎりや豚汁に舌鼓をうった。そして、予定通り14時過ぎには裏道登山口に着了いた。

(梶田民雄)



御在所山コース、出発に際して全員集合 (JAC旗の右が和田支部長)

2006年マナスルでの教訓

南井英弘

一昨年のマナスル挑戦から帰国後、1年3カ月をかけて体力作りを行なった。ボッカ、耐寒訓練、富士山登山、常圧低酸素室での特訓。さらに、オリンピック選手のアドバイザーを務める東京大学大学院大谷勝教授のご指導を受け、下腿、上腿、腕、胸、腹までしっかりとした筋肉がついた。

するように薦められた。

BC入り後、息苦しさもなく、 SP_{O_2} 値や放尿量も夜間の2リットル強を含め仲間と同じような数値を示し、嘔吐、下痢、熱感覚もなかった。高所の影響ではないと、自分では判断していた。

2週間分の胃潰瘍の薬も払底したので、何とか対策をとらねばならない。遠征には常時携帯している『登山の医学ハンドブック』（杏林書院刊、日本登山医学研究会編）を、薬をも掴む思いで読み返した。結果、電解質の喪失が食欲不振の原因らしいと、やっと気づいた。

ポカリスエットを口にし、食欲も徐々に回復して、アタックに発する朝には何とか皆と同じ量を腹に流し込む事が出来るまでになった。BCを出て数時間後、ナイケ・コルに近づいた時に、左大腿部全体が万力で締めつけられるような衝動を感じた。まだまだ多くのクレバスやスノーブリッジを渡らねばならない。この異様な衝動のたびに歩行を中断して、ゆっく



下部氷河を行く隊員

りともみながら、万力で締めつけられるような痛みが消えるまで立ち止まった。意識はしつかりしていたが、クレバスを飛び越えたり、クレバスを大股で跨ぐと大腿部全体どころか左半身全体がガチーンと固まってしまうような気がした。

このような衝動がC1入りするまで10回ほど起こった。C1のテントに入った直後、左足を伸ばそうとした瞬間に、今にも左半身全体が固まりそうな衝動が数分続いた。やがてこの衝動も自然に消滅した。このような体調に鑑み、翌日は下山の途についた。BCに帰着して、再び『登山の医学ハンドブック』を読み返したところ、この締

めつけるような衝動は「筋硬直」であることが分かった。電解質の不足、特にナトリウム不足が原因であることを知った。

帰国後、執筆者である野口いつみ氏にこの症状を話したところ、血液検査をしていないので確定はできないが、「低ナトリウム血症」の症状の可能性が高いとのことだった。食欲不振と筋痙攣は低ナトリウム血症の代表的な症状である。電解質のバランス異常として、低ナトリウム血症は比較的起こりやすい。筋硬直の発作（痙攣）は「いきなり起こる制御できない激しい筋肉の収縮」とされている。ポカリスエットや塩分を取らずに大量に水ばかり飲んだ結果、水分摂取過剰となり、希釈性低ナトリウム血症になったようだ。

私のヒマラヤ登山の最高の舞台で、入山時の体調が良かったために油断が生じ、迂闊にも初歩的な取り返しのつかない失態を演じた。あと一歩無理をしていればもっとひどい筋強直を起し、マナスル氷河の底か、マナスル山頂より高い所に旅立ったことだろうと戦慄を覚えた。

東 西 南 北

N

S

会員の皆様のご意見、エッセイ、俳句、短歌、詩などを掲載するページです。どしどしご投稿ください。(紙面に限りがありますので、1点につき1000字程度をお願いします)

バッジを巡る話

手塚宗求

今から15年前のこと、大阪在住の知人である岡原茂(故人)さんから、J A Cのバッジ(337番)をいただいた。岡原さんは単独行の好きな方で、かなりの山を歩かれていたが、J A Cの会員ではなかった。

どのような経緯があつて岡原さんがこのバッジを手に入れたのかは不明だ。「私が持っていたも仕方がないので手塚さんに」と言つて渡された。そのバッジに刻印された番号が若いので、「このバッジはどんな方が持っていたのだろう」と興味があつた。J A Cに聞けば判明するだろうと思ひ、事務局の人に問い合わせた。しかし、「資料がないので、お答えできません」

ん」という返信であつた。

以来、そのままになっていたところ、平成18年10月に、旧知の高島法男(京都支部会員)さんとの歓談中にバッジの話がでた。私が事情を説明すると、11月24日に高島さんから次のようなハガキが届いた。

「日本山岳会、会員番号337番ですが、大正10年12月現在の名簿によりますと、黒田長敬・大正3年1月入会。住所は、東京市赤坂区福吉町一とあります。黒田姓で、名に「長」がつくとなると「黒田公」ではないかと(黒田武士、黒田長政の末かと。これは調べられたら、面白いことになるかも知れません」

たかがバッジのことくらいで何事かと思われながらも、以前事務局より、資料がまったくないからという返答だった。なんらかの手がかりになればと思う。

相模国府祭

祖父川精治

相模国府祭と書いて「サガミコウノマチ」と読み、例年5月5日に端午祭とも呼ばれ遠い昔から執り行なわれてきた相模国最大の古代神事である。国内の由緒と格式のある一之宮寒川神社(寒川町)、J R駅名の二之宮川勾神社(二宮町)、三之宮比々多神社(伊勢原市)、四之宮前鳥神社(平塚市)、平塚八幡宮(平塚市)、総社の六所神社(二宮町)が大磯町の西にある神揃山へ参集する。今年の一之宮をどこに決めるのかという神事を座問答といい、全国的にも実に珍しいもので、神奈川県無形民俗文化財に指定されている。

国の中心に国府を置き中央より国司が任命されてその国の行政に当たらせ、着任すると有力大社へ巡拝して回る制度があつた。この回る順位によって一之宮、二之宮と称するようになってきたといわれる。しかし時代を経て国司の国内巡拝には日数と費用、人手を必要としたので、各神社の御分霊を国府近くの神社へ合祀して祈願所

としたのが総社の起源といわれる。相模国では東を相武、西を磯長といい、それらが合併して相模国が成立したといわれる。それぞれの国の一之宮がうちは一之宮ですというようない争いが起き、比々多、前鳥、八幡宮の各社が仲裁へ入って円満解決をした。その様子が儀式化され古式神事となつて1000年余も継承してきたのが座問答であるといわれる。正午の打ち上げ花火を合図に、いよいよ座問答が始まる。2頭のトラの毛皮を用い、上座へそれぞれが置き換えること3度目で仲裁として四之宮比々多神社の宮司が進み出でて「いづれ明年まで」と声高く唱えて円満解決となる。

その後、高天原に見立てた大矢場斎場の馬場公園では、巫女舞や船形舞台上で鷲の舞いが執り行なわれる。式典の参列に各社宮司のほか関係者の中に、古代の衣装に威儀を正し長剣を佩いた国司役には例年地元の大磯町長が当たっている。昔は周辺に農具市が開かれここで農器具を購入すると豊作になるといふ信仰があつたが、今では露天商が数多く立ち並び、終日は賑わい混雑している。

支部



全国各地の支部から、
それぞれの活動状況を、
北から南へとリポート
します。

宮崎支部

第22回宮崎ウエストン祭

感銘深かった会長の記念講演

11月3日に行なわれた第22回宮崎ウエストン祭は、平山善吉会長を迎えて開催されるという意義深い催しとなった。

ウエストン祭前日の2日は、平山会長に特別記念講演をしていた。会場となった、宮崎県立高千穂高等学校体育館には、「わが国南極観測の50年」という演題に、生徒650人が集った。

九州のヘソとも言われている神話と伝説の里・高千穂町で、第1次南極観測隊員として選拔され、第2次、第3次の越冬隊員として参加、活躍された平山会長だけに、期待がもたれた。その南極での体験談をまじえた講演、スライドや動画の映像は迫力があつた。生徒たちは、未知の南極という世界に

対し、憧れと感動を抱いたようであり、熱心に聞き、見入っていた。かつぼう酒で交流を深めた前夜祭講演会終了後は、高千穂町五ヶ所高原の公民館に移動し、熊本と北九州支部の会員18人と合流し、地域の人達が主催する恒例の前夜祭に参加した。

前夜祭会場では、登山者の安全と自然の恵みに感謝する神事が執り行なわれた。その後、仮設舞台では地元につながる伝統芸能の神楽や、大太鼓演奏、地元の小学校児童や地区住民などによる歌や踊りなどが次々披露され、大いに盛り上がった。

前夜祭終了後は、宿舎の五ヶ所公民館に場所を移し、同宿する熊本と北九州支部会員との交流会が再開され、さらに盛り上がり、親睦を深めた楽しい夜となった。

晩秋の高原でのウエストン祭

宮崎ウエストン祭は、ここ数年、



ウエストン顕彰碑の前で (中央が平山会長)

天候に恵まれず残念な思いをしてきたが、今回は透き通るような晩秋の青空のもと、紅葉に染まった五ヶ所高原・三秀台会場に約150人が集まった。

式典は、午前9時に五ヶ所小学校児童による点鐘を合図に始まり、ウエストン顕彰碑の前で師を偲び、黙祷と献花をささげた。その後、高千穂町町長、平山会長、町会議長の挨拶があり、続いて「ウエストン師に捧ぐ鎮魂と新たな誓い」の詩の朗読の後、全員でエーデルワイスの歌を合唱し、9時40分に終了した。

明治23年11月6日にウエストンが登った祖母山(1757m)が

くつきりと雄姿を見せ、この式典を暖かく見守っているかのように感じられた。

九州の尾根、祖母山記念登山

式典終了後、10時30分に記念登山開始。祖母山系は紅葉の名所であるが、今年の紅葉は、色艶が悪い。その原因は、例年に比べて寒さの訪れが遅いことと、秋の中旬から後半にかけて雨が降らず、乾燥した日が長く続いたからだという。日本特有の四季の移り変わりの中で、最近、何かが少しずつ変化していると感じることがある。

千間平から三国峠を経て約3時間、祖母山に着いた。障子岳、古祖母山を見下ろす壮大なパノラマの景観を楽しみながら昼食をとる。その後、平山会長を中心に記念写真を撮り、記念登山を終えた。

宮崎ウエストン祭は、毎年11月3日に開催され、師の神を信じる心、人間愛と自然愛に満ちた行動が人々に幸せをもたらすという理念を深く心にとどめるものである。そしてわれわれも、人と自然が共に助けあつて生きていくための努力を怠ってはならないと、再認識するものである。

(末永軍朗)

山形支部

8月山行

山形支部の8月山行は、台風とフェーン現象でうだるように暑かった8月19・20日に鳥海山で行なわれた。参加者19名。総会並みだと皆が喜ぶ。

19日、山形県側の登山口の大平山荘で、まずは暑気払い。会員が持ち寄った地酒がずらりと並ぶなか、鳥海山の伏流水が噴出する海底に生息する、庄内で一番おいしいといわれる遊佐の岩がきを味わう。一口では口に入りきらないほど大きく肉厚で、野趣あふれる磯のかおりが口中に広がる。あわび、



可憐な花々が咲く筈ヶ岳山頂

小ガレイ、だだちゃ豆など、庄内の夏の味覚を堪能する。会員である遊佐町町長も参加して、鳥海山遊佐町の自然や将来のことなどで多いに盛り上がった。夕涼みに外へ出ると、風が心地よい。星を見上げながら会員の吹くハーモニカの「昂」に聴き入る。

20日、鉾立・賽ノ河原・河原宿・筈ヶ岳・お浜・鉾立コースを歩く。あつちの山、こつちの山と闇雲に頂上を求めた時を過ぎて、今は山頂を踏まなくても心穏やかに山を楽しむことができるようになった。人に出会うことのない静かなコースで、山の花々を愛で楽しむ。雪渓が消えたところには可憐なヒナザクラやイワカガミが咲き、筈ヶ岳・お浜までの稜線は一面のお花畑である。凜としたウメバチソウ、紅色のハクサンフウロ、おとなしげなシャジン、ミヤマリンドウ、ニッコウキスゲ、ウサギギク、ハクサンイチゲ、鳥海アザミ、ぐいぐいと飛翔するオニヤンマ。千畳ヶ原を取り囲む外輪山の山肌の緑が目美しい。

今回も気のおけない山の仲間たちと、ゆるやかに山を楽しむことができた。

(佐藤映子)

バンフ・マウンテン・フェスティバル2006年

サッチ・益田

10月28日から11月5日まで、初冬のバンフで山岳祭が開かれた。

第13回山岳図書祭には、イギリスの注目クライマー、アンディ・カーパトリック、フリークライマーでベースジャンパーのレオ・ホールディング、アメリカからセントラル・アジア・プロジェクトのグレグ・モートンソン、作家のジェフ・ロング、ノルウェーから極地探検家のボーガ・オスランドなどが招待され、最近の冒険談をそれぞれが披露した。

9カ国、113冊の参加図書より、山岳ミステリーの『ザ・ウォール』ジェフ・ロング著（アメリカ、2006年）が選ばれた。

第31回山岳映画祭には、16年ぶりに冬季ヒマラヤ8000m級の峰の登頂に成功したイタリアのシモネ・モロ、1972年のアンデス山脈飛行機事故から72日後に生還したウルグアイの元ラグビー選手のナンド・パラド、地元ケンモアのアイスクライマー、ウィル・ガットなどが招待され、それぞれが

出演、演出した映画の裏話が紹介された。

35カ国、324本の参加映画より「コンフリクト・タイガー」（イギリス、2005年）が最優秀賞を受賞した。

今年もバンフ・マウンテン・フェスティバルは、同時期に開催予定。詳細は次のHPから検索できる。

www.Banfmountainfestivals.ca



ATLAS TREK

個人手配旅行から人気のトレックツアーやエクスペディションのアレンジまで。充実度が違う「旅」のプランニングをこころがけています。山旅などあらゆるジャンルを取り扱っています。お気軽にご連絡ください。

株式会社 **アトラストレック**
(国土交通大臣登録旅行業1167号)

東京/〒160-0008 東京都新宿区三栄町25 三栄ハウス202 TEL 03-3341-0030
大阪/〒540-0012 大阪市中央区谷町3-4-5 中央谷町ビル501号 TEL 06-6946-9111
名古屋/〒464-0807 名古屋区千穂区東山通り5-113 オークラビル6F TEL 052-788-2422



231	マカルー	ジャン・フランコ 近藤等 / 訳	白水社	1956 箱	500
233	登山史の発掘	山崎安治	茗溪堂	1979 箱	500
242	ヒマラヤ 山と人	深田久弥	中央公論社	S31 箱	500
247	忘れえぬ山の人びと	望月達夫	茗溪堂	1986 箱	500
249	氷と雪	加納一郎	梓書房	S4 カバー	1,000
250	アムンゼン探検史	ロアルト・アムンゼン 加納一郎 / 訳	朋文堂	S17 再版 カバー	500
253	遙かなりエヴェレスト	島田 巽	大修館書店	1981 カバー 署名入	500
254	そこに山がある	今西錦司	日本経済新聞社	S48 箱 署名入	500
259	谷川岳研究	長越茂雄	朋文堂	S29 カバー	400
263	垂直と水平の道	高木正孝・渡邊兵力	創文社	S36 箱	400
264	森林・草原・氷河	加藤泰安	茗溪堂	1976 2 版 箱	1,000
269	北の山 続篇	伊藤秀五郎	茗溪堂	1976 箱	1,000
279	山は満員	渡辺公平	茗溪堂	1975 カバー 署名入	400
280	小島鳥水	近藤信行	創文社	S53 4 刷 献呈署名入	800
286	エーデルワイスの詩	坂倉登喜子	茗溪堂	1976 カバー 献呈署名入	500
288	登山の小史と用具の変遷	西岡一雄	朋文堂	S33	400
293	山を想えば 百瀬慎太郎遺稿集	百瀬慎太郎	百瀬慎太郎遺稿集刊行会	S37 箱	1,000
297	アンデスからヒマラヤへ	浜野吉生	白水社	1966 再版 箱	500
299	チョゴリザ	京都大学学士山岳会	朝日新聞社・李家正文	S34 署名入	500
300	サルトル・カンリ	京都大学学士山岳会	朝日新聞社・浜名二正	S39	400
314	一九七〇エベレスト登山隊報告書	日本山岳会		S47 箱	1,000
315	山岳技術考 金坂一郎遺稿集	金坂一郎	茗溪堂	1988	500
327	西堀栄三郎遺稿 1・2・3・別巻 (4冊)	西堀栄三郎	悠々社	1991 カバー	2,000
331	登山の技術 上・下 (2冊)	日本山岳会 / 編	白水社	1978 3 刷・2 刷 箱	400
335	日本山嶽志	高頭 式 / 編	野島出版	S45 箱	2,000
338	富士山	深田久弥 / 編	青木書店	S15 初	800
339	峠	深田久弥 / 編	青木書店	S15 3 版	500
340	シルクロードの旅	深田久弥	朝日新聞社	S46 箱	500
361	山・よき仲間	成瀬岩雄	茗溪堂	S37 箱 献呈署名入 500部限定番号入	500
362	山旅記	山川 力	紫紅会	S51 カバー 箱 500部限定番号入	400
366	エヴェレスト登頂	ジョン・ハント	朝日新聞社	S29 カバー 特装本	400
390	新ハイキング 別冊関西版 71冊		新ハイキング社	21号(95.3月)~91号(06.11月)	1,000
391	世界紀行文学全集 山岳 I 編	志賀直哉・佐藤春夫・川端康成 / 監	修道社	S36 箱	1,000
392	世界紀行文学全集 山岳 II 編	志賀直哉・佐藤春夫・川端康成 / 監	修道社	S36 箱	1,000
396	東京農業大学山岳部報告 第2号	東京農業大学山岳部		1937年 昭和12年	1,000
Y1	THE KANGCHENJUNGA ADVENTURE	F.S.Smythe	V.Collancz Ltd. London	1930	10,000
Y2	NANDA DEVI	E.Shipton	H. & Stoughton London	1937	10,000
Y3	THE ASCENT OF NANDA DEVI	Tilman	Machmillan Co. London	1937	10,000
Y4	CAMP SIX	F.S. Smythe	H. & Stoughton	1937	10,000
Y5	SOUTH COL	W.Noyce	Heinemann	1954	5,000
Y6	Opere Complete (4冊)	Guido Rey			50,000
	I IL MONTE CERVINO		Edilibi Andrea Viglono, Torino	1962 カヴァー	
	II ALPINISMO ACROBATICO		Cellezioni Montes, Torino	1953 カヴァー	
	III IL TEMPO CHE TORNA LA FINE DELL'ALPINISMO		同上	1954	
	IV ALBA ALPINA		同上	1954 カヴァー	
Y7	Les plus belles montagnes du Monde	Glenat	Yama Kei, Tokyo	1991 箱	40,000
Y8	Les Etats-Unis : Les Plus Belles Escalades	Romain Vogler	Denoe, Paris	1984	6,000
Y9	Die Schoensten Berge der Alpen	L.Trenker & H.Dumler	Bruckman, Muenchen	1978 2 nd.ed. カヴァー	5,000
Y10	Die Schoensten Hoehenwege der Westalpen	L.Trenker & H.Dumler	Bruckman, Muenchen	1981 3 rd.ed. カヴァー	4,000
Y11	A History of Mountaineering in the Alps	C.E. Engel	G. Allen & Unwin, London	1950	3,000
Y12	Chamonix Mont-Blanc	R.G.Collomb	Constable, London	1969	4,000
	Zermatt and District (2冊)	R.G.Collomb	Constable, London	1969	
Y13	Das Matterhorn in Bild	Anton Gattlen	Rotten-Verlag, Brig	1979	4,000
Y14	Cent ans d'affiches : Chamonix Mont-Blanc		E. Clounet, Paris	1991	3,000
Y15	Clubhuetten	Schweizer Alpen-Club	Verlag des SAC, Zurich	1976	3,000
Y16	Grindelwalder Bergfuehrer	Samuel Brawand	Berghannen Grindelwald-First	1973	3,000
Y17	100 hikes in the Alps	I. Spring & H. Edwards	The Mountaineers, Seattle	1985 4 th. Ed.	3,000
Y18	Scrambles amongst the Alps	Edward Whympers	J. Murray, London	1966 Reprinted カヴァー	3,000

●記名、線引き、若干の汚れなどはお容赦ください。

●頒布価が400円未満のものは掲載を省略しています。全目録はホームページ(図書委員会)から検索できます。また、必要な方には郵便でお送りします。

●問合せは、図書委員会・三好まき子まで ☎(090-8019-8601) ✉(hirata@hon-s.co.jp)

図書交換会出品目録および購入申し込みのご案内

図書委員会では、来たる3月3日(土)に「山岳史懇談会」に併せて「図書交換会」を開催します。出品図書は400点を超え、出品者のご好意により、たいへん安価で提供できることになりました。交換会当日の詳細は18ページのINFORMATIONを参照ください。なお、交換会当日に来場できない方は、下記の要領で購入の申し込みを行なってください。

- 郵便（日本山岳会・図書委員会あて）またはメール（hirata@hon.s.co.jp）で、2月20日までに申し込みください。
- 購入希望図書の番号、書名、購入希望者の名前と会員番号を必ずご記入ください。
- 入札本（★印）の場合も、入札価格を記入のうえ、同じ要領でお申し込みください。
- 希望が重複した図書は、当日に抽選で決定します。
- 送料は購入者負担とし、交換会終了後に代金と一緒に請求させていただきます。

★1	山のぬくもり	畔地梅太郎	創文社	S54 手摺木版画集(7葉各台紙貼) 100部限定 番号入サイン入 箱	★最低価格 50,000から入札
2	世界山岳地図集成 カラコルム・ヒンズークシュ編		学研	S53 箱	5,000
3	山岳史	藤原 肇	東明社	1992 追悼版	500
4	空にたどよう峰	松永敏郎	アボロスポーツ	H3 箱	500
5	京大探検部	京大探検者の会	新樹社	2006 カバー 帯	1,000
11	北壁-原武遺稿集	原 武	北壁編集委員会	S39 箱	800
19	全日本ヒマラヤ登山隊報告書	全日本山岳連盟	東海地区山岳連盟	S39	500
21	日本百名山	深田久弥	新潮社	S53 24刷 箱	1,000
24	山Ⅰ 山Ⅱ 山Ⅲ(3冊)	串田孫一/編・解説	筑摩書房	S35・S36 箱	2,000
33	奥秩父研究	原 全教	朋文堂	S34	500
34	八ヶ岳研究 上	独標登高会	朋文堂	S38	1,000
36	山-紀行と随想	大島亮吉	好日書房	S22 カバー	500
37	大島亮吉全集 3 先蹤者	大島亮吉	あかね書房	1970 箱 帯	1,000
38	大島亮吉全集 5 大島亮吉研究	大島亮吉	あかね書房	1970 箱	1,000
39	シルクロードの旅	深田久弥	朝日新聞社	S46 箱	500
42	白きたおやかな峰	北 杜夫	新潮社	S44 15刷 カバー	500
47	北の山 続篇	伊藤秀五郎	茗溪堂	1976 箱	1,000
48	山に忘れたパイプ	藤島敏男	茗溪堂	1970 箱	1,000
49	マカルー	ジャン・フランコ 近藤等/訳	白水社	1956 箱	800
50	ダウラギリ登頂	マックス・アイゼリン 横川文雄/訳	ベースボールマガジン社	S38 箱	800
51	ブモ・リ	ゲルハルト・レンザー 緒方郁映・橋本信/訳	ベースボールマガジン社	S40 箱	800
52	雪と岩	ガストン・レビュファ 近藤等/訳	新潮社	S37 2刷	600
53	天と地の間に	ガストン・レビュファ 近藤等/訳	新潮社	S38	600
54	山と雪の日記 復刻版	板倉勝宣	大修館	S50 500部限定 番号入	500
62	剣の窓	山崎安治	二玄社	1962 箱	500
63	山の序曲	山崎安治	朋文堂新社	S42 箱	600
85	旅立ちの記 上・下 (2冊)	本多勝一	講談社	1982 カバー 帯	500
88	越後の山旅 上・下 (2冊)	藤島 玄	富士波書房	S55 再版 カバー	500
107	山と峠と氷河	成瀬岩雄	茗溪堂	S61 箱	500
164	偃松帯	織内信彦	朋文堂	S16	500
193	ヒマラヤ紀行	J.D. フーカー 薬師義美/訳	白水社	1979 箱	1,500
197	日本アルプスの研究	矢沢米三郎	三省堂	S10 箱	500
199	ブモ・リ	ゲルハルト・レンザー 緒方郁映・橋本信/訳	ベースボールマガジン社	S 40 箱	700
200	ダウラギリ登頂	マックス・アイゼリン 横川文雄/訳	ベースボールマガジン社	S 38 箱	800
204	カフカズの山旅	袋 一平	あかね書房	1969	500
217	山 光と影 現代山岳写真家代表作集		山と溪谷社	S 53 箱	2,000
218	世界山岳地図集成 ヒマラヤ編		学研	S 52 箱	5,000
219	遠き近き	松方三郎	龍星閣	S 26 箱	1,000
220	松方三郎	松方三郎	共同通信社	S 49 カバー	500
225	マナスル登頂記	横 有恒	毎日新聞社	S 31 カバー 献呈署名入	500
226	横有恒全集 I・II・III (3冊)	横 有恒	五月書房	1991 箱 帯	3,000
229	山の心	横 有恒	毎日新聞社	S 49 カバー 献呈署名入	800

活動報告

日本山岳会の各委員会、同好会の活動報告です

学生部

第43回日本山岳会学生部マラソン大会開催

11月12日、皇居外苑において、第43回日本山岳会学生部マラソン大会が開催された。

当日は好天に恵まれ、応援するには少々肌寒いものの、走ると汗ばむ程度の絶好のマラソン日和となり、首都圏から集まった15大学82名が、日ごろのトレーニングの成果を発揮した。

近年、部員減少に伴い、徐々に活動が縮小傾向にある大学山岳部であるが、本年は数年ぶりの参加となる大学や、新規加盟を求める大学からの参加もあり今後の展望に期待が持てる。

団体戦(5^キ×4名)では、明治大学が1時間15分42秒で1年ぶりに優勝杯を奪還した。2位は昨年の覇者、東京農業大学(1時間



青空の下、日ごろのトレーニングの成果を競いあった

17分30秒)が、3位は日本大学(1時間18分32秒)であった。

個人戦(男子15^キ、女子10^キ)では、男女ともに2年連続で日本大学の鶴原孝祐(59分26秒)、立教大学の小山さやか(47分33秒)が優勝した。

(学生部委員長 澤井京太)

自然保護委員会・山梨支部後援

自然と人間の暮らしを考える フォーラムINハケ岳&勝沼

1987年以来、多くの人に親しまれてきた「フォーラムIN」が、去る10月27・29日の第20回をもって幕を下ろした。

最終回は、小諸の懐古園、上田の無言館を経て、A班、甲斐大泉B班、原村に分宿。翌日、A班は編笠山、B班は白駒池方面を歩いた後、勝沼ぶどうの丘の記念集会に参集した。

この会は、当時の國見利夫自然保護委員長、室俊司(教育学者)、矢倉久泰(ジャーナリスト)氏らの協力を得て、子どもたちへの自然保護教育を目的にスタートしたものだった。やがて子どもたちは巣立っていき、参加者の高齢化が進んだが、体力に合わせた選択コース、多様な学習テーマ、コンサート、演劇なども加えて、毎回100人を超える盛況だった。しかし、最近では中心メンバーにも支障がでるようになったので、これで一応の区切りとすることにした。記念集会は、創立メンバーの矢倉さん、第1回の開催地尾瀬から

日本全国9都市よりソウル経由でカトマンズへ(発着地)札幌・函館・青森・新潟・東京・名古屋・大阪・岡山・福岡

発表!! 大韓航空カトマンズ線就航記念

春のネパール・ヒマラヤ・トレッキング10日間

出発日: 2007年3/18、3/25、4/8

●アンナプルナ・ダウラギリ・パノラマ・トレッキング

●エベレスト展望トレッキングとシェルパの里

●ランタン・ヘリ・トレッキング

●マカルー・カンチェンジュンガ展望トレッキング

◎詳細パンフレットをご請求下さい。

国土交通大臣登録旅行業第490号/社日本旅行業協会正会員 求コド優待会員
ALPINE ツア サービス 株式会社

〒105-0003 東京都港区西新橋1-12-1 西新橋1 森ビル2F ☎03-3503-1911
大阪 ☎06-6444-3033 名古屋 ☎052-581-3211 福岡 ☎092-715-1557

e-mail: info@alpine-tour.com http://www.alpine-tour.com

参加した平野紀子さんの祝辞に続き、古屋学而山梨支部長の乾杯で始まった。会場には、毎年参加してくれた安曇野からの一行も駆けつけ、東北や九州からの常連の顔もあって、料理は簡素ながら、賛助出演の民謡、邦楽、声楽に助けられて、和やかな時を過ごした。なかでも無言館にちなんで、戦没者に捧げる鎮魂歌「かわいそうな鬼」が心をうった。

最終日は、訪問先へのお土産として演劇「米百俵」とシャンソンを一般公開したが、これで最後と各地から日帰りで参加した人も多

二火会 大多摩ウォーキングトレイル を歩く

11月14日、川合愛子会員の案内で、奥多摩・多摩川の峡谷沿いに整備された「大多摩ウォーキングトレイル」8・3^{キロ}のんびり歩いた。参加者11名は、うららかな小

く約200人ほどが会場を埋めた。多くの人の善意に支えられたフォーラムIN、「人はあかねどゆく春を いつまでここに」とどむべき」(藤村「晩春の別離」)の一節に思いを託しつつ散会した。

(近藤 緑)



フォーラムINハケ岳&勝沼、参加者の集合写真



終点の奥多摩駅に到着して記念撮影

春日和のハイキングを楽しんだ。9時30分にJR青梅線の古里駅を出発した。古里駅から青梅線の終点の奥多摩駅までの鳩ノ巣駅、白丸駅の三駅分を多摩川の峡谷に沿って、整備された遊歩道を上流へと遡るように歩いた。右岸から左岸へ、左岸から右岸へと幾度か渡りかえしたり、尾根を巻く上り下りの起伏はあるが、ほぼ水線通しの景観の変化に富んだコースであった。

この秋、東京近郊の紅葉は鮮やかさに欠けると言われているが、白丸ダムの人造湖、白丸湖では、鏡のような湖面に、対岸の紅葉が写し出され、息を呑むほどに鮮や

短歌

短歌

かであった。まさに、秋たけなわ！この場所で、ゆつくりとランチタイムを楽しんだ。

13時50分、奥多摩駅に到着して記念撮影をして解散した。

同行された柴田初子会員は、12月米寿をお迎えになられる由、この場をおかりしてお祝い申しあげます。

(松島岳生)

内山脩一

日本の登山・スキーの発展を側面で支えた店

好日山荘往来(上)

大賀寿二著／四六判／310頁／2625円

山とスキー用具の変遷と店の戸をたたいた岳人たちの話。

シルクロードの風 山と遺跡とオアシス

内田嘉弘著／A5判／284頁／2520円

チベット、中央アジアの山からゴビ沙漠、青海省の旅。

比叡山1000年の道を歩く

竹内康之著／A5判／152頁／1680円

お山へ登る道、京への峠道、延暦寺三塔十六谷の堂塔を結ぶ道。

2006年秩父宮記念山岳賞受賞!!

雲の上で暮らす アンデス・ヒマラヤ 高地民族の世界

山本紀夫著／四六判／400頁／2730円

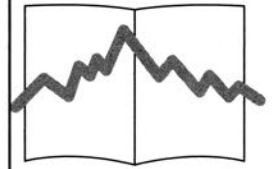
美しくも厳酷な環境で暮らす人びとに寄りそった40年。

新日本山岳誌

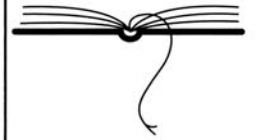
日本山岳会編／菊判／1992頁／18900円

創立百周年記念出版。日本全国4000山の情報を網羅。

〒606-8161京都市左京区一乗寺木ノ本町15
ナカニシヤ出版 TEL.075-723-0111 FAX.075-723-0095
http://www.nakanishiya.co.jp/〔表示価格は税込〕

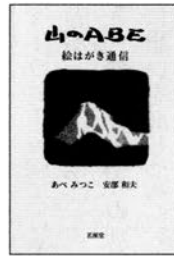


図書紹介



あべみつこ／安部和夫・著

『山のABE—絵はがき通信』



2006年6月
茗溪堂刊
四六版 269頁
定価 3360円

の絵であつたりするのだが、「GARI通信」とあるようにガリ版刷りなのだという。

鉄筆でガリガリ切った文字、跳ね上がる謄写版、修正用のロウ。ガリ版には、そんなイメージしか浮かばない身としては、この美しい絵の数々をガリ版(孔版)でどう作り出すのか興味津々。ぜひその制作過程を見てみたいものだ。

毎回の絵の脇には、日々の生活で感じたことや心に残ったことが書き添えられ、そのひと言ひと言が心にしみる。24年という月日のなかで変わっていくもの、変わらなかったものの……。読者は自分の時間をもふり返り、その日々の大切さに気づかされる。

本書の味わいを、言葉で伝えることは到底できない。まずはとにかくページを開いてほしい。

(三好まき子)

まずタイトルに遊び心があふれている。『山のABC』と間違えてしまいそうだ。著者の「あべ」さんにちなんだ名づけられたものだ。24年にわたって送り続けられた、ガリ版刷りのはがき通信を一冊にまとめたのが本書。途中の号からはがき通信に添えられたという、夫君の安部氏の「四方山通信」の文章も後半に掲載されている。一見すると多色刷りの木版画を思わせる絵はがきが200枚。それは山の絵であつたり、植物や野菜の絵であつたり、素朴な土人形

大澤雅彦／他・編

『世界遺産 屋久島—亜熱帯の自然と生態系』



2006年10月
朝倉書店刊
B5版 278頁
定価 9975円

屋久島は日本の南端に位置する高山の島であり、高山が雲を呼び、雨が深い樹林とコケを育み、清流が瀧と滝を刻す、瑞々しい水の島である。その植生の多様さ、自然の豊かさから、1993年に世界遺産に登録された。

本書は、世界遺産「屋久島の自然と人の将来を考えたとき、島の自然についての科学的な理解がすべての前提になる」との思いから、屋久島の自然の成り立ちと自然と人とのかわりについて、科学的かつ総合的な視点から取りまとめられた解説書である。

現在、屋久島で研究を続けている第一線の研究者が執筆を分担し、それぞれの分野の最新の知見と研究成果を集大成し、素人にもわかりやすくという方針の下に編集されている。

内容は、気候、地形から植物相と植生、動物、人の暮らしと植生とのかかわり、自然利用の歴史、保全の取り組みの経緯、エコツアーの現状と今後の方向まで多岐にわたっており、本書を読めば、屋久島の自然と歴史、課題がひと通りはわかるようになっていく。

屋久島研究の学術資料としても、また屋久島に関心があり屋久島を訪れようとする人のガイドブックとしても最適の資料である。また、自然保護に関心のある人には、ぜひ一読をお奨めしたい。

私もこの島に魅せられて1963年に初めて訪れて以来、これまで通算8回の山行を行なった。亜熱帯林、前岳の照葉樹林、ヤクスギ林、奥岳の孤高の頂と、いつ登ってもすばらしい山であることに変わりはない。これからも人々を魅了し続けるだろう。

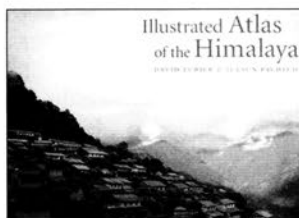
しかし、最近では島の変貌に驚くことも多くなった。その一つはヤクシカの増殖である。山上から海岸までどこへ行っても見かけるようになった。そしてヤクシカの食圧が種の多様性を著しく傷つけている。シカの選別捕食は、シカが好まぬ種以外の地表植物にとって

壊滅的である。多くの貴重なシダ類をはじめとする草本が、まったく見かけなくなっている。早急に取り組むべき課題であろう。本書にも、各所に自然保護に関しての警鐘が記されており、「屋久島の自然にさらに深く親しむきっかけを得て、貴重な自然の保全の意味を考えていただきたい」というのが編纂者の願いである。

(龍久仁人)

David Zurick / Julsun Pacheco・著

『Illustrated Atlas of the Himalaya』



2006年
Univ. Press of Kentucky刊
211頁 260mm×340mm
US \$ 50.00

分厚く大判の書物ではあるが、題名からどんな内容が想像できなかった。本を開くと人工衛星から撮ったヒマラヤのカラー写真が目飛び込んできた。過去に登った山や氷河がはつきりと見える。目

が釘付けになり時間の経つのも忘れしほの間、眺め込んでいた。

25年に及ぶフィールド・ワークを重ねた地質学者で写真家のNEEらと、地理情報システム・スペシャリストのPachecoが協力して作り上げた著書である。

ヒマラヤを西はインダス河、東はブラマプトラ河、北はチベット高原、南はインド平原までを範囲として捉え、パキスタン、ネパール、インド、ブータンを中心とした4枚の衛星写真が目を引く。

本書はこれらの衛星写真による地図を中軸に各地方の様々なデータ、山や街の地図、ヒマラヤの高峰や民族関係の写真、地質と構造図、ヒマラヤの造山活動、植生や資源の分布図、経済状況、地域による文化の違いなど豊富な内容を集積したヒマラヤ博物学事典とも言えよう。とにかく、これらの資料類がそれぞれカラーで表現されているので一目瞭然、その上、嬉しいことに各種情報や統計資料など陳腐化したものでなく最新のデータが使用されている。

ちなみに目次は次の通り。1部、地域設定。2部、自然環境(地質、気候、自然の危険性)。3部、社会

(初期文明、人口、文化と民族、転住と開発、交通網、人材開発、統治と人権)。4部、資源と環境保全(耕作地、森林、鉱物資源、水資源、野生生物、将来像)。5部、探検と旅(巡礼と秘境の旅、初期の外国人、英人探検家、登山者、トレッキングと現代旅行)。そして各項目の原典、参考著書目録など。地図は大小合わせて120点。各種統計グラフ、調査表や作図が28点。ヒマラヤを地図上で149地域に分けた地域名の一覧表や750以上の地名・山名などを記した索引は利用者に便利だ。手元に置いておきたい書籍である。(南井英弘)



山の仲間 K. Okano

図書受入報告 (2006年12月)

著者	書名	ページ・サイズ	出版元	刊行年	寄贈/購入別
加藤好美(編)	パンバリヒマール遠征隊2006—First Flush	118pp/26cm	日本山岳会学生部	2006	発行者寄贈
大川健三(著・撮影)	蜀山女神—四姑娘山	124pp/29cm	四川美術出版社	2006	中村保氏寄贈
創立50周年記念誌編集委員会(編)	早稲田大学の会50年のあゆみ—創立50周年記念誌やま	446pp/27cm	稲門山の会	2006	発行者寄贈
海老根勇・伊藤フミロ(共著)	実戦 バックカントリー—入門とガイド	117pp/21cm	東京新聞出版局	2006	出版社寄贈
矢野雅之・他(共編)	わらじ 年報29(2005年度活動報告)	361pp/21cm	わらじの仲間	2006	発行者寄贈
小川慶治	源流地—山旅が実在した時代	197pp/21cm	日本女子大教育文化振興協会出版部	2006	著者寄贈
山本紀夫	雲の上で暮らす—アンデス・ヒマラヤ高地民族の世界	389pp/20cm	ナカニシヤ出版	2006	著者寄贈
内田嘉弘	シルクロードの風—山と遺跡とオアシス	269pp/22cm	ナカニシヤ出版	2007	著者寄贈
長倉洋海	西域の貌—Silk Road	127pp/25x35cm	山と溪谷社	2006	出版社寄贈
雁部貞夫	歌集 琅玕	263pp/20cm	短歌新聞社	2006	著者寄贈
Norman Hardie	On My Own Two Feet	323pp/23cm	Canterbury Univ. Press	2006	出版社寄贈
Mark Watson(ed.)	New Zealand Alpine Journal 2006 (Vol.58)	148pp/25cm	New Zealand Alpine Club	2006	発行者寄贈
Harish Kapadia(ed.)	The Himalayan Journal (Vol.62, 2006)	167pp/26cm	The Himalayan Club	2006	発行者寄贈



12月理事会

日時 12月20日 18時30分～20時
場所 日本山岳会会議室

【出席者】平山会長、平林・橋本・田邊各副会長、吉永・賛田・石田・篠崎・大蔵・野口・斎藤・藤井・石橋・古野各理事、山本・竹中各監事、小倉・重廣常任評議員

【委任】渡邊理事・今村常任評議員

【審議事項】

1 事業委員会の再編構想について

事業委員会を山行主体の「事業委員会」と平成19年1月より実施する「土曜懇話会」等の集會部門に分ける案が検討されたが、年度途中であることから「土曜懇話会」を先行試行することとし、委員会分割については実績等を勘案して平成19年当初に再検討することとした。

(一部承認・一部継続)

報告

2 「上高地山岳研究所」利用料金の改定(案)について

平成19年4月末の開所時より利用料金を左記のとおりとし、より利用率を高めることとした。

●非会員5000円→4000円
●中学生5000円→1000円
(新設)

●小学生以下1500円→無料
●会員の配偶者3000円→会員の配偶者・家族3000円

●支部会友5000円→3000円
(新設)

ただし、月曜日夜から金曜日夜までの利用を「ウィークデー割引」として、中学生を除く利用者の料金を割引く。この場合、団体割引の適用はない。

●会員及びそれに準ずる者2000円
●非会員3000円

(承認)

3 同好会設立について

同好会名：101の会

設立：平成18年12月6日

代表者：諏訪義春(No.14255)

目的：平成18年入会の会員連絡・懇親を図る

懇親を図る

会員数：42名(平成18年12月16日現在)

(承認)

4 写真掲載許可願：ネクストインク株式会社

1921年当時の横有恒氏の写真3点(スイスインフォ/スイス国際放送)のウェブサイトで、横氏の著書「わたしの山旅」の朗読を配信するキャンペーンのパンフレットに使用

(承認・有料)

【報告事項】

1 平成18年度年次晩餐会について(吉永)

去る12月2日、東海支部主管で名古屋市「ウエスティンナゴヤキャッスル」にて開催され、全国より約430名の参加者があった。特に、ローツェ南壁隊と直接交信及び高校生によるオーケストラが好評であった。

2 名誉会員の推薦(吉永)

去る11月25日開催の評議員会で、左記の2氏が名誉会員に推薦され、12月2日の年次晩餐会において顕彰された。

●松田雄一氏(No.4111)

1953年～56年マナスル登山をはじめ、本会の海外登山派遣に対する積極的な貢献及び本会業務全般に対する長年に亘る多大な寄与が顕著であった。

●ハリッシュ・カパディア氏(インド在住・非会員)

長年にわたってヒマラヤン・ジャーナル編集長として活躍され、2002年日印合同カラコルム踏査パドマナブ登山隊を組織、総隊長として成功に導いた。また、本会に対し、多数のインド・ヒマラヤに関する地図・文献等を寄贈され、インド・ヒマラヤ研究の発展に貢献した(同氏は英国山岳会、アメリカ山岳会の名誉会員に推挙されており、2003年にはアジア人としては125年ぶりとなる英国王立地理協会のゴールドメダルを受賞している)。

3 信濃支部創立60周年記念式典について(平林)

去る11月25日、松本市において

開催され、70余名の参加を得て盛大に執り行なわれた。平林副会長が出席し、「山と企業と私、信濃支部の思い出」と題する記念講演を行なった。

4 越後支部創立60周年記念式典について(橋本)

去る12月9日、新潟市において開催され、60余名の参加を得て盛大に執り行なわれた。橋本副会長が出席した。

5 マナスル初登頂50周年記念式典・記念行事(田邊)

96名の参加者を得、去る12月9日、18日に実施された。

●12月11日 ネパール登山協会主催・初登頂者の市内パレード及び記念式典

●12日 ネパール登山協会主催・記念レセプション(参加者全員出席)

●13日、18日 記念トレッキング

6 委員長会議(吉永)

去る12月5日開催され、行事等実施状況及び予算執行状況についての報告があった。併せて、今後の予算要求等の日程について協議した(2月20日予算会議)。

7 山陰支部年次晩餐会(吉永)

去る12月16日、米子市において開催され、25名の参加を得て盛大

に行なわれた。吉永常務理事が出席し、公益社団法人化についての講演をした。

8 大台ヶ原・西大台地区利用調整地の指定の検討について(篠崎)

本会が協力している中央環境審議会自然環境部会において吉野熊野国立公園区域及び公園計画に関する諮問について原案どおり答申がされた旨の報告があった。

9 06年11月度入会者 新入会員12名、復活1名

訂正：平成18年11月理事会議事録の【報告事項】12「海外登山計画検討委員会」とあるのを「長期登山計画プロジェクト」と訂正いたします。

ルーム日誌 12月

4日 総務委員会 図書委員会

三水会

5日 委員長会議

6日 山岳地理クラブ

7日 フォトビデオクラブ 山の

自然学研究会

11日 自然保護委員会 アルパイ

ンスキークラブ 01会

12日 中央分水嶺委員会 二火会

14日 アルパインスケッチクラブ
学生部 青年部
16日 緑爽会 ゆきわり会 20
06 同期会

19日 インターネット小委員会
00会

20日 理事会 三水会 つくも会
高尾の森実行委員会

21日 科学委員会 青年部 アル
パインスキークラブ 山
遊会

22日 自然保護委員会 つくも会
25日 プモリ研究会

26日 支部化促進委員会
27日 常務理事会 麗山会

12月来室者479名

会員異動(12月)

物故

小林 年 (6319) 06・8・6

宮本康博 (9213) 06・11

米澤 清 (4746) 06・12・2

鈴木 孝 (9552) 06・12・14

三日月直之 (1654) 06・12・18

小駒山人 (3911) 06・12・24

退会

伊藤頌司 (6266)

宮本周三 (7080) 関西

岩井 誠 (7894)

田口幸子 (10362)

加藤良三 (11630) 信濃
終身会員
中川智康 (6069)

改名

穴倉祥子 (13030) ↓小川祥子

青蔵鉄道チベット走破9日間
～ゴルムドからラサ 1,142km 走破 海拔5千mを体験～
4/28 発 ¥398,000

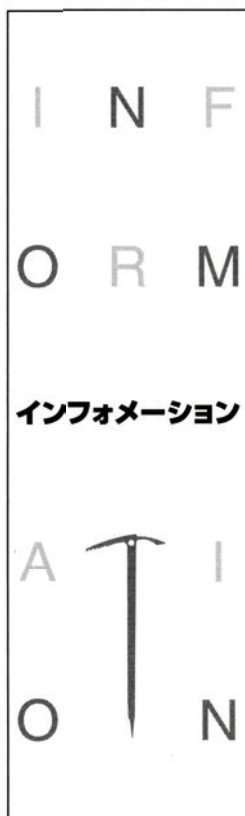


航空機のように車内は与圧され、酸素吸入設備もある

Wec 株式会社ウェック・トレック
国土交通大臣登録旅行業1662号/日本旅行業協会正会員
〒105-0003 東京都港区西新橋3-24-8山内ビル4階
電話 03-3437-8848 E-MAIL info@everest.co.jp



幸せを呼ぶ鳥 版画・奥野漢石



◆第37回山岳図書を語る夕べ

図書委員会

『大ヒマラヤ探検史—インド測量局とその密偵たち』を語る。

大ヒマラヤを舞台に繰りひろげられる「グレート・ゲーム」と、インドの密偵「パンディッド」の活躍を、ヒマラヤ書誌の第一人者である著者が語ります。

日時 2月19日(月)18時30分

会場 山岳会104号室

講師 葉師義美氏

問合 平井吉夫 TEL 03-33385

19206

◆第24回図書交換会

図書委員会

会員より提供された山岳古書、約420点を安価で頒布します。めったにない機会です。ぜひご参加ください(出品目録は10・11ページに掲載)。

また、交換会終了後、会場を移し「山岳史懇談会」を開催します。

日時 3月3日(土)12時より購入申し込み、および抽選を開始します(11時30分から本の内覧ができます)。開始時間に遅れないようご注意ください。

場所 山岳会集会室

問合 三好まき子 TEL 090-801918601

hirata@hon-s.co.jp

◆講演会 医療委員会

「登山のためのトレーニング」のように体力をつけて怪我・膝腰痛を予防するか」の講演を行ないます。

講師 山本正嘉氏(鹿屋体育大学)

日時 2月20日 18時30分～20時30分

場所 東京体育館 第1会議室

(JR千駄ヶ谷駅前)

定員 120名(定員に達し次第締め切り)

参加費 無料

申込 2月15日までに氏名、連絡先を記入の上、日本山岳会・医療委員会まで FAX、ハガキで申し込んでください。

FAX 03-3261-4441

03-3261-4441

jacimed@yahoo.co.jp

問合 野口いづみ

FAX 042-463-2871

◆鼎談「山の人生・山の文化」今西錦司・深田久弥・山崎安治三氏のことなど」 緑爽会

日本の山岳界に大きな足跡を遺した三氏について、親しく薫陶を受けた後輩たちが語ります。

講師 近藤信行、平井吉夫、山本良三

期日 2月3日(土)14時～17時

場所 日本山岳会集会室

参加費 資料代500円

申込 松本恒廣 FAX 03-33326

12892 または、近藤緑

hachi-kondo@nifty.com

◆講演会のお知らせ

新土曜会

大貫氏は東京大学名誉教授(文

化人類学)、永年アンデス地方でプ

レインカ文明の発掘調査に従事、

先史時代の装飾品としての金細工

を発掘したことで知られていま

Climbing & Medicine · 58

高地と遺伝子
—山での悲劇を防ぐために—

大野秀樹

エチオピア高原、チベット高原、アンデス高原に住む人たちは、代表的な高地住民です。最近の研究によると、各住民が低地から高地に移り住んだのは、それぞれ今から約5万年、2万3000年、1万年前のことでした。ちなみに、チベット民族を基点とすると、エチオピア民族とは約10万年、アンデス民族とは4、4万年前に共通の祖先を有しています(日本民族は、チベット民族と約2万年前に分岐しました)。高地への順化時間の差が主な要因となっているためか、各民族の高地適応形態が異なっています。

すなわち、一般にエチオピア民族には赤血球増多症、動脈低酸素血症がみられず、一方、チベット民族には低酸素血症のみが、アンデス民族には両者とも認められます。その結果から、エチオピア民族が最も高地順化に成功し、チベット民族が中間に位置し、アンデス民族は、実際にモンゲ病(慢性高山病)の発症が稀ではないように、順化途上といえるでしょう。これら3民族の間に遺伝子配列の著しい多様性がみられ、目下、環境要因の影響とともに精力的に研究がなされています。

このように、遺伝子や分子生物学がさまざまな分野に浸透してきました。登山界も例外ではありません。たとえば、1998年に発表されたモンゴメリーらのアンギオテンシン変換酵素遺伝子(ACE)の解析は、登山界に強い衝撃を与えました。つまり、日本人では約4分の1に存在するDD型(詳細は、『山』676号参照)の人は無酸素で8000m峰に登れず、さらに持久運動能力も小さいというものです。他の遺伝子にも、これに類する発表がいくつかなされはじめました。しかし、それほど心配はいりません。まず、通常の疫学研究と比較して、「高地と遺伝子」研究の対象者数が小さ過ぎます。DD型無酸素登山に関しても、今後、例外がたくさん出てくることが予想されます。現に、DD型の一流持久運動アスリートが数多く存在しています。

平均値(統計学)で比較するのではなく、最終決定は個人差でなされるべきです。しかし、遺伝子情報の有用さが決してなくなるわけではありません。たとえば、高地肺水腫(HAPE)のような重篤な急性高山病の既往者は、ぜひヒト白血球抗原(HLA)の遺伝子検索を受けてください(詳細は、『登山医学』19巻参照)。再発者の100%に特別なタイプがみられるからです。ACEも含めて、自分の遺伝子タイプを知っていれば、山での悲劇を防げる可能性があります。最後に、生活習慣病でも同様ですが、遺伝子がすべてを決めるのではなく、環境要因や各人のモチベーションがさらに重要であることを強調しておきます。

日本山岳会会報 山 740号

2007年(平成19年)1月20日発行
発行所 社団法人日本山岳会
〒102-0081
東京都千代田区四番町5-4
サンビュウハイツ四番町
TEL 東京(03)3261-4433
FAX 東京(03)3261-4441
発行者 日本山岳会会長 平山善吉
編集人 神長幹雄
Eメール jac-kaiho@jac.or.jp
印刷 株式会社 双陽社

■訂正とお詫び
12月(739)号9ページ下段16行
「遠藤周作」は「藤沢周平」の誤り
でした。お詫びして訂正します。

す。申し込みは不要です。
演題 「アンデスの黄金」
日時 2月14日(水) 15時～17時
場所 山岳会104号室(予定)
演者 大貫良夫会員
◆笠原健二郎の山の絵展
30数点の山の絵を展示します。
会期 2月18日(日)～24日(土)
(11時～19時。初日は13時から、最終日は17時まで)
場所 東京交通会館(B1 エメラルドルーム)
交通 JR有楽町駅、または地下鉄有楽町線A8番出口より
問合 笠原健二郎まで(TEL & FAX 045175312852)